

横浜

Yokohama Representative

横浜レポート ルネサンス

Number 8

特集

横浜を見る

横浜を詠む

Who's Who in YOKOHAMA

横浜の定番

いいこと、
いいもの、
いっぱい。

Yokohama

ヨーロピアン

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長
斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第8号をお届けします。今年から本誌は春と秋の年2回発行することになりました。本号では鑑賞の秋にちなんで横浜とアートの関連をテーマとした「横浜を観る」を特集しました。横浜らしくポップな感覚を意識した編集を目指しましたが、いかがでしょうか。

前号から始まった企画「横浜を詠む」には歌人の水原紫苑さんに引き続きご登場いただきました。また、新企画の「横浜の聴き方」では荒井由美の「海を見ていた午後」を中心を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第8号、お楽しみいただければ幸いです。

A Table of Contents

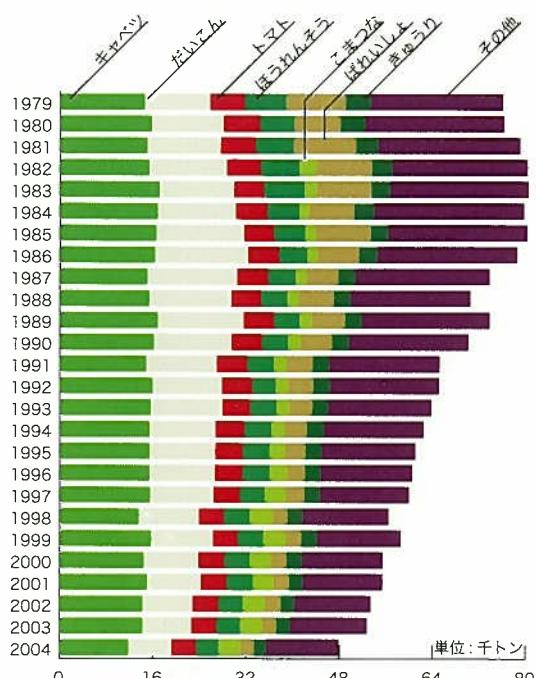
横浜絵解き図絵／こまつなと横浜	2
目次／理事長挨拶	3
特集 横浜を観る	
伊藤有希 アニメーション・ディレクター	
緑の芋虫から始まった新しいアニメの仕掛け	4
天野太郎 キュレーター	
美術館の存在理由を模索する『アイドル展』の企画者	6
森田会里 ドール・アーティスト	
人体の美しさを追求する等身大人形の創造者	8
増田博一 経営者・デザイナー	
「和」+「洋」+「時代」の融合を目指す二代目器師	10
渡部健司 DCプロデューサー	
デジタル・アーカイブ構築を目指すクールな情熱家	12
水原紫苑 〈写真：矢部志保〉	14
Who's Who in YOKOHAMA	
田中潤・裕子 税理士・経営者	
教養・文化を大切にする夫のプレゼントは夫婦協業	16
原良枝 エッセイスト	
ヒロインたちの女心を読み解く律儀な読書家	18
横浜の定番	
有賀茂／瀧澤靖	
地場で培われた世界に誇る技術	20
横浜の聴き方	
中島久	
「よこはま・たそがれ」「海を見ていた午後」	22
横浜ジェリービーンズ俱楽部通信	23

表紙：横浜美術館で2007年1月7日まで開催中の『アイドル展』にて。撮影・矢部志保

◎横浜絵解き図絵

こまつなと横浜

横浜野菜の収穫量の推移



こまつな（小松菜）の収穫量全国1位が横浜市だと言うと驚く人が多い。こまつなは東京都江戸川区小松川が発祥の野菜だが、農林水産省の統計によると、それまで収穫量トップだった江戸川区を抜いて、横浜市が平成15年産・平成16年産で、全国1位となっている。そんなこまつなだが、横浜市内における野菜収穫量では「キャベツ」「だいこん」「トマト」「ほうれんそう」に続く第5位となっている。

こまつなの平成16年産の収穫量は3,760トン。出荷時の荷姿に換算すると約940万束で、これは市民1人当たり2.5束が行きわたる量となる。

市内の主要産地は、都筑区・港北区・戸塚区。年間を通じて作られ、市内に供給されている。

こまつなは関東地方の代表的な緑色野菜。カルシウム、ビタミンA、鉄、カリウム、食物繊維などを多く含む。ビタミンB2の量は野菜の中でもトップクラス。カルシウムの量は、ほうれん草の5倍で、カロチンの量も同じぐらいなので、総合評価ではほうれん草より栄養価が高くなっている。

栽培期間が短く、いろいろな環境に対応できるこまつなはハウス栽培、トンネル栽培、露地栽培と一年を通して生産されているが、昔は、冬場に収穫されるので冬菜とも呼ばれていた。現在は品種改良され四季を通じて収穫されるが、やはりおいしいのは冬とされる。

スーパー・マーケットや八百屋の店先では、こまつな品種名までは書いてないが、種苗会社による品種改良も盛んで品種名登録されている品種は75余(2001年版野菜品種名鑑)となっている。その中には、「なかまち」という、都筑区仲町台に由来するものまで存在する。

新緑の芋虫から始まつた 新しいアニメの仕掛け



大人から子どもまで大人気のクレイアニメ

緑の小さな芋虫が、街のいたるところで冒険を繰り広げる立体アニメーション「ニヤッキ！」。

一話五分という短い時間ながら、粘土ならではの温かみある画面とシユールなティストで子どもから大人まで多くのファンを持つ。

NHK教育テレビ「ブチブチ・アニメ」枠内で放送され、1997年には文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞を受賞した。

生みの親である伊藤有志さんは、CM、テレビ番組など、多方面で活躍中のアニメーションディレクターだ。

CGなど、最先端技術を駆使する会社に勤めていた頃、クレイ（粘土）と出会い衝撃を受ける。

「ペンも絵筆も要らない、道具は自分の手ひとつ。だから右脳の中身がダイレクトに出る。原始的且つエキサイティング。キレイなら見る人に迫る作品を作れると確信しました」。

その後NHKから「子ども向けの番組を」と発注されたことをきっかけにクリエイションでの表現をスタート。国際的なアニメフェスティバルに入選

した際、日本のアニメーションに対する意識の低さを感じた。

何か新しいアニメーションを作ることはできないか……。その想いから生まれたのが「ニヤッキ！」。

あえて、日本にはない手法を駆使した。五分間のサイレントアニメ。記号とともに見える一本の棒状の芋虫で、ユニークな世界を作る。

伊藤さんは、最新技術と古典的手法のクレイ、両極端にある二つのツールを融合させた、新しいアニメーションの仕掛け人となつた。

美味しい「アニメ」のおもてなし

どんなにファンが増えても、対象は2～6歳の子どもたち。

「いつでもマイペースなニヤッキのように、無理して周りに合わせる必要はない、伝えたい」。

荒波に揉まれながらも陽気で前向きなニヤッキに自分を重ね「元気になれる」という大人のファンも多い。

受け取り手の気持ちは自由。好きに見て欲しいですね。作家の想いを投影していく一方通行の作品じゃなく、視聴者が作品とコミュニケーションを取り

する、双方向のものを創りたい。僕が提供しているのは、美味しいおやつみたいなもの。ちょっとした時間で、びっくりしたり、楽しんだり、考えたり……。アニメーションで、五分間のおもてなしをしているつて感じかな」。

そのユニークな感性は、一体どこから生まれるのだろうか。

「まず自分の内側と向き合うこと。そして、外側と向き合うこと。材料はすべて外にあるんです。

取り巻くすべてが自分のソース。ヒントも必ず周りにある。作り手に必要なのは、セレクトして編集する力なんです。

何気ない風景からの発見、ピカッと光ったひらめきは、頭にストックしておこう。その星同士がつながって、ひとつ星座になつたとき、面白いものが生まれる……」。

つながるまでに、結構時間がかかったりするんですけどね（笑）」。

今年、都内から横浜万国橋SOKOに活動拠点を移動。横浜から、新しいアニメーションの流れを作りたいと言う。

「子どもの秘密基地をイメージしているんです」というスタジオから、今度はどんなユニークないたずらを、仕掛けるつもりなのだろうか。▼

いとうゆういち
東京芸大デザイン科卒。1998年アイトゥーン設立、同代表。クレイを中心にさまざまなアニメーション技法を駆使し、TV番組、CM、ミュージックビデオ等で活躍するアニメーションディレクター。代表作「ニヤッキ！」(NHK教育)、宇多田ヒカルや平井堅のMV、クレイアニメ制作ソフトの監修も手がける。NHK「デジタル・スタジアム」キュレーター、大阪芸大客員教授、東京芸大非常勤講師、日本アニメーション協会理事。

美術館の存在理由を模索する 『アイドル展』の企画者



あまのたろう
1955年大阪生まれ。横浜美術館次席学芸員。北海道立近代美術館勤務(1982-87)を経て、1987年より横浜美術館学芸課長補佐として国内外での数々の展覧会企画に携わる。美術評論家連盟所属。

『アイドル展』
会期：2007年1月8日まで。休館日：毎週木曜日（ただし11月23日は開館）、11月24日（金曜）、12月29から31日、1月1日（月曜・祝日）。開館時間：10時から18時（金曜は20時）※入館は閉館の30分前まで。入場料：大人1000円 大学・高校生600円 中学生300円。
会場：横浜美術館 ☎ 220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 Tel: 045-221-0300

美術館の存在理由を模索する時代

美術館は冬の時代を迎えていたと言われて久しい。人間に生きる意欲と潤いを与える芸術文化も、福祉や教育などの公共サービスと同一レベルの俎上に置かれ、市民に対し美術館の存在や活動の意義への理解を得なければならなくなつたからだ。

また、その一方で、各自治体は財政難を理由に美術館予算を削減しつつある。年間約153万人の利用者（平成17年度）実績を持つ、横浜美術館もその例外ではない。横浜市が負担する美術館運営費（平成17年度は7億1347万7720円（補助金十委託料含む）。これを1日当たりに換算すると約195万円。人口約360万人の横浜市民は毎日ひとり約0・55円ずつ払つている計算となる。

そうした状況を鑑みて、横浜美術館ではさまざまな摸索をしている。その苦心や努力の部分を学芸員の天野太郎さんに伺つた。同氏は、現在好評開催中のユニーク企画『アイドル展』の企画者である。

まずは、市民が美術に何を期待しているかを知るために努力だ。地域の人があしらがるものを見つけてくる。あるいは地域でおもしろい人を発見する。

理想は見ることを強制しない美術館

たとえば、『日本×画展』でデビューシークン『アイドル展』の企画者でもある。こうした口コミ的努力は、宣伝にもなるが、地域に活動の意味を伝え、刺激を与えるという意味でも成果が上がつているようだ。

横浜美術館の子どものアトリエの日本画教室に参加したことがきっかけとなつて日本画を専攻したということだった。「手名付けられている。

もうひとつは、アーティスト・イン・ミュージアム。これはアーティストの創作現場を開いて、作家自身が何を考え、何をしているのかを見せる。そうすることによってアートに近づきやすくする努力だ。また、美術館の中だけで完結するのではなく、地域社会へ出かけていくワークショップを開催し、市民と一緒に作品を創ることも実施している。

聞いてみると、同氏は、小学生の頃、横浜美術館のアトリエの日本画教室に参加したことがあります。そこで、日本画を専攻したということだった。手名付けられている。

もうひとつは、アーティスト・イン・ミュージアム。これはアーティストの創作現場を開いて、作家自身が何を考え、何をしているのかを見せる。そうすることによってアートに近づきやすくする努力だ。また、美術館の中だけで完結するのではなく、地域社会へ出かけていくワークショップを開催し、市民と一緒に作品を創ることも実施している。

こうした口コミ的努力は、宣伝にもなるが、地域に活動の意味を伝え、刺激を与えるという意味でも成果が上がつているようだ。

横浜美術館の現実はどういえば、カフェも最近オープンしたばかりで、時間が過ごせるような美術館。

しかし、横浜美術館の現実はどういえば、カフェも最近オープンしたばかりで、時間が過ごせるような美術館。

「開かれた」「親しみやすさ」を感じる所になるためにはまだまだ努力すべきことがあるたくさんある」という。

同館にも自慢のタネがないわけではない。シユールレアリズムとか、日本の写真史を概観できるコレクションとか、それなりにある。だが、一番の誇りは、約9万冊のライブラリー。「これはファーストクラスです。すべて美術関連で、大学の蔵書よりはるかにすぐれている。これをもつと使ってもらいたい」。使われてこその美術館というわけだ。

人体の美しさを追求する 等身大人形の創造者



もりたえり
1980年生まれ。長崎県出身。2003年日本大学芸術学部卒業後、東京銀座・京橋ギャラリー「手」で『えりも人形展』を開催したのがきっかけとなって、朝日新聞社主催「Oh!水木しげる展」の公式フィギュア原型を担当。芹沢良克監督ドキュメント作品「ERIMO」に主演するなどして現在に至る。保土ヶ谷区在住。中区の日本大通に面するZAIMにスタジオを持ち作家活動を展開中。

偏見と戦いながらの学生時代

本物に見まごうほどリアルな人形からは、一種の倒錯性や耽美性が感じられる。『本物らしさ』があればあるほど生理的拒絶感と隣り合わせとなるからだ。それ故に、シユールリアリストックな人形師たちは世間のフツーの人からは偏見を持つて見られることが多い。

生きているとしか思えないほどリアルな人形を造るドール・アーティスト森田会里さん（通称・えりもさん）も例外ではない。学生時代から応募作品が専門誌の金賞を取るなど、その世界では注目の人材だったが、それはアートではないと、随分偏見の目で見られてきたそうだ。

「私は、見る側の驚きを引き出したいだけ。すごく重そうに見える石が、実は発泡スチロールでできていたり、動かないと思ったものが動いたりすると人は驚く。それと同じように人形も人間以上に人間らしいと人は驚く」。確かに倒錯的だがそれはアートの喜びでもあり、創作意欲をかき立てる原動力ともなる。だが大学ではたったひとりの先生を除いてほとんど理解者を得られなかつた。

転機となつたのは、03年に大学卒業と同時に開いた銀座のギャラリー「手」で

の個展。唯一の理解者だった先生の紹介だった。これが、雑誌『美術手帖』で好評されたことがきっかけで社会的に認知され、翌年には朝日新聞社から等身大の「水木しげる人形」の制作を依頼された。そして、「あれは何だったのか」というほど学校関係者の態度が変わるのが見てしまた。

そんな彼女の記憶に残る最初の人形作りは、小学生時代の工芸の時間。ボーズは自由と言われて100メートル走のスタートラインでかまえる立像をイメージしたことに遡る。

「これがおもしろくて、どこまでも追求できたし、やめたくなかった」。だが、同時にこれ以上やつたらまずいのではないかと怖くなつて、「あえて色塗りはちよつとヘタにしておいた」。

それでも、まわりの子どもたちが造るモノとはあきらかに際だつた出来映えだつた。素材は紙粘土。小学五年生の時だつた。それがきっかけとなつて、えりもさんは積極的に人形を作り始めた。

媚びず、退かず、閉じずに対話

しかし、造るモノにはどこか、リカちゃん人形や、アニメの線が出ていた。それ

が気に入らなかつた。もつとリアルに、もつと人間らしくと独學で追求するうちに、造るモノがだんだん大きくなつて最後には等身大人形になつた。

すべて独學。部品のないものは自作してイメージを完結した。一番大きなものはなんと190cm。F.R.P.製だつた。

「生きている人間の体こそが一番美しい。まずはそれを表現できなければと追求した結果」だつた。

だが人間を型取つただけではリアルな表現にならない。精神的なものを取り込めるためだ。だから、えりもさんは対象のモデルとよく対話をした後制作する。「媚びず、退かず、自分を閉じないで、一度相手のすべてを自分に中に取り込んで、消化する。相手のことばをかみこなしてからワツと出す感じ。造つていると、きは、その人になりきつているかもしれない」と思うくらい集中する。

消耗するが、完成時の本人から「自分のいやなところまでそつくり！」と驚嘆されるほど大満足なのだそうだ。

これから課題は、人形を動かすこと。
筋肉、骨と運動して自然な形で動くものを作つて、アニメにしたい」。偏見を乗り越えた創造者は、今新たな創造物を作

「和」+「洋」+「時代」の融合を 目指す二代目器師



伝統と時代との融合をを目指す

「和」と「洋」が融合する街、横浜。そこには様式に対するこだわりがない。新しい文化や精神をどんどん取り込んで融合していくことが街の気風となっている。横濱増田窯にはそんな街の伝統や気風がたぐみに取り入れられている。

明治の昔、「横浜焼」はかつて世界に向けて輸出される人気商品だった。中でも、西洋と東洋の技術やデザインを取り入れた宮川香山はパリ万博やヴィーン万博など、数多くの世界万博に参展し金賞を取るなど脚光を浴びていた。

だが、そんな横浜焼も関東大震災や太平洋戦争の大空襲などにより一度立ち消えてしまった。その伝統と精神を1965年（昭和40）に復活させたのが、横濱増田窯だった。

店主の増田博一さん（34歳）は二代目。ヨコハマブルーで横浜開港時の情景を描いた「横浜南蛮絵図」シリーズや、漆器のような深い黒色の「蒔絵（まきえ）」シリーズ「絵皿が定番だった増田窯に、金や銀を使った幾何学模様などモダンなデザインを導入し、和と洋のみならず「時代との融合」を目指している。たとえば、Ant（アント）というブ

ランドは「舶来の香り」がするテーブルウエアーギフト製品。

同じ音だが、庵陶（あんとう）は、「和」の雰囲気が強い商品。Masudaは世界に向けて発信する高級商品といった具合だ。「亡くなつた父が残してくれたものを引き継ぎ残していく方向性と、自分なりの個性を活かすアントショップ」というモダンアートの器の両方を開拓している」そうだ。

博一さんのデザイン・コンセプトは明快だ。

「日本人の食生活を見ると和もあり洋もある。世界的に見てもまれな多様性がある。いちいち食事ごとに和食器だ、洋食器だとしていられない日常がある。そんな生活の状況を取り込む器、統合する器」とは何かと考えてデザインした。

たとえば、「使い勝手の良さが、個性という付加価値を生むことを計算した『フリーカップ』。茶碗のようなコーヒーカップのようなこの器には取っ手がない。大胆なデザインだけど、行き過ぎではない。お茶を入れたり、お菓子を入れたり、アイデア次第でさまざまな用途に使える。また、取っ手がないから、収納するときもたくさん積み重ねることが可能だ。

器が変わると生活も変わる

そんな博一さんにとって器は、「生活を向上させていく道具」という位置づけ。道具によって気分が変わると、「気分が変われば生活も変わってくるし、自分自身も向上していく」という点が、100円ショップの器との違いだ」と言う。

「あえて個性的な皿に盛った方が、料理が化けるのです。有名なシェフでも理解していない人が多いのですが、白い皿だと何かを変えることができない。料理と器を統合するような感覚を持つて自分の世界を表現するひとつのが、一つとして扱ってくれるとうれしいのですけどね」。博一さんは、そんな考え方を普及させる試みのひとつとして元町の「霧笛楼」と組んで、「横濱増田窯テーブル&ペインティング・スクール」という協働作業を昨年から始めた。これは、お客様に絵付けを体験してもらい、完成した皿を「霧笛楼」に持ち込んで食事をするという試みだ。狙いは、単純にモノを作るのではなく、作った器がいかに自分の生活を向上させていくかを実感してもらうこと。

「器が変わると生活も変わることをつかんでもらえれば最高の幸せです」と締めくくった。

まだひろかず

1969年横浜生まれ。1987年、セントジョセフインターナショナルスクール（横浜）卒業。1991年、ロードアイランド造形大学（アメリカ）インタストリアルデザイン科を卒業後、「横濱増田窯」入社。途中1年ほど有田の「源右衛門窯」への研修を経て、2003年に「横濱増田窯」代表取締役に就任。

デジタル・アーカイブ構築を目指すクールな情熱家



東京の呪縛から逃れて横浜へ

映画『ULTRAMAN』の中で、CGを駆使して新宿副都心をバーチャルに再現し、ウルトラマンが思う存分活躍できる舞台を構築したのが渡部健司さん（45歳）だ。

構想力・技術力に加えて緻密さと根気を要求されるCGの現場。そのノウハウを抱えて横浜に拠点を移したのは2年前。理由があつた。

「東京にいると呪縛を抱えて忙しいばかりで仕事や自分を見直す余裕やきっかけをなかなかもつてない。東京に対抗するのではなく、距離を置いてオフ東京で自分を出せる環境はないかと行き当たつたのが横浜」だつた。

調べてみると横浜は興味深い街だつた。本を紐解き、資料をあさつているうちに、教科書的な知識に止まつていた

横浜の歴史が頭の中で動きだし「デジタル・アーカイブ」という発想が涌いてきた。150年前には寒村だった街が、歴史の流れの中で変貌していくさまをCGにして記録して残そうというアイデアだ。

「リアルの世界とバーチャルの世界を組み合わせていけば、CGが表現する世界は広がる。でも、ツールやソフトに依存していくはダメ。その一方で、表現したいものがあればソフトの開発から手がけにまとめてみた。

交流の場を通じたインキュベーション

だが、そんな熱情はみじんも感じさせず。渡部さんは静かに続ける。

「リアルの世界とバーチャルの世界を組み合わせていけば、CGが表現する世界は広がる。でも、ツールやソフトに依存していてはダメ。その一方で、表現したいものがあればソフトの開発から手がけ

シナリオから取材・構成、CG、撮影まですべて渡部さんがひとりで作り上げた。「CG屋さんは、映画の見せ場を担う重要な仕事なのに、コンテンツ操作しかできないと見られがち。デジタル・アートライブという結果を構想して動けば、新しい創造環境を生み出せるかもしれない」という思いからだつた。

今やコンピュータの力を借りることなく映像作品を作り上げることは困難な時代となりつつある。だが、CGを制作した人たちには版権や著作権が渡されない。CGの黎明期から現場にたずさわってきた渡部さんには、「せつかく苦労して作つても実績が残るだけです」と請負生活動を余儀なくされる。そんな現状を変えないと日本のコンテンツは昇華しない」という熱い思いもあつた。

「力を使つける環境や、協力しあう環境を用意すればそれは可能だということを証明したい」。名将・山本五十六ではな

いが、やつてみせて言つて聞かせてやらせて見てほめてやらねば人は動かず」というわけだ。

『ハマクリ』もすでに26回。今年の7月には日本大通に面するZAIMに「デジタル・アーカイブの常設プレゼンテーション・ルームを持つた。

「ひとつ段階をクリアすれば、また次のイメージが浮かぶ。だから、限りがない」とどこまでも渡部さんは冷静だ。

だが、「もっとクリエイターの権利が守られるシステムを構築しなければならない」と新たな「創造の場づくり」に取り組む渡部さんの活動は着々と結果を出し

るぐらいの技術力がないとだめ。

さらに、用途やメリット、表現の要求レベルに合わせてツールやスタッフを使い分ける才能も必要だ」。

そのため、毎月1回、渡部さんがおもろいと思う活動をしている人たちを集めめて『ハマクリ』というサロンを主催している。交流の場を作り、制作者たちを刺激しようというたくらみだ。

わたなべけんじ

D/Function Inc 代表。DC プロデューサー＆スーパーバイザー。JCGL、ナムコでCG プロデューサー兼ディレクターを務めた後、独立。1992年にCG をプランニングプロデュースする会社 D/Function 設立。TV-CF、番組、展示映像、ゲーム、劇場用映画のCG プロデュースから企画、制作、プロデュース、マネージメント、ディレクション、スーパーバイズまで何でもこなす。

秋風にめぐりてゐたる観覧車 海の王女が天近く居り

水原紫苑

写真 矢部志保

港近くにある大観覧車を眺めるのが好きだ。いつもゆっくりと、風にそよぐほどの速さで巡っている。気持ちがよさそうだ。
乗つてみたいと思つて、人と乗つたことが一度だけある。実際に乗つてみると、高いところにあがつたときは怖くて早くおりたかった。やはり私は眺めているだけがいいようだ。
海からやつて来た、人魚姫のような海の王女が、観覧車に乗るところを想像してみた。
陸のものは何でも珍しい海の王女は、観覧車がめぐつて天に近いところまで行つたら、どんなにか心が躍るだろう。車の小さなお部屋から飛び出して、そのまま天に向かつて飛びたくなつてしまつかもしれない。
だが、ドアは開かず、やがて車はゆっくり海の王女を地上に運ぶ。
天の思い出をかかえて、海に帰つて行く王女の、胸のひだには、今までになかつた青い光が宿つているのではないだろうか。

みずはら しおん

歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『びあんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(銀音)』『いろせ』『あかるたへ』、著作『世阿弥の墓』『星の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞、駿河梅花文学賞受賞、河野愛子賞受賞など多数受賞。

やべ しほ

写真家。1974年東京生まれ。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地勲に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。ポートレート、舞台写真、旅行写真を中心に活動中。2006年11月公開の映画『アジアantomブルー』では、松下奈緒演じる写真家のヒロインの劇中写真とスチールをすべて担当した。

田中潤・裕子

Who's Who In Yokohama



起業のきっかけとなつた一言

旺盛に異文化を取り込んできた先進性、進取性こそが横浜の魅力として編集されたのが、「横浜地図草紙」(異郷と故郷を歩く) (歴史探訪社刊)だ。横浜をテーマに取材を重ねてきたジャーナリスト、作家など豪華執筆陣に加えて、要所要所に現在の写真と往事の絵はがき、錦絵を重ねた贅沢な本作りは開港150周年を迎えるとする横浜を捉える好著となつてゐる。

同著を編集したのは歴史探訪社の代表取締役田中裕子さん(43歳)。鎌倉にお住まいの主婦でもある。同社は、子育てに手間がかからなくなり何かやりがいのある仕事はないかと考える主婦が集まつて2001年に起業された。当時の鎌倉は、それまであまり知られていなかつた中世のさまざまな文化が発掘によつて解明されつつある時期だつた。

「当時の人々の考え方や暮らしぶりを知り

鎌倉の歴史の再認識をすることは、環境の保全や街づくりを考えるきっかけとなり得る」となり、最初に『鎌倉地図草紙』を出版した。

「編集内容的には、たまたま近所に中世考古学研究所に所属して発掘調査をして

教養は邪魔しないをモットーに

ピアノ、作曲、歴史、俳句と多彩な趣味を持つご主人の信条は「教養は邪魔しない」。税理士として横浜で数多くの経営者に接してきた経験からも「教養は自分で表現し、相互理解を促進し、人間関係を豊かにする」と強く感じるそつだ。

出版については何も知らない素人」だった。それ故に、編集が完了し出版にこぎ着けたのは会社設立後、3年目のことだつた。しかし、その苦労の甲斐あつて2冊目の出版となつた『横浜地図草紙』の編集にはさほど時間はかからなかつたといふ。

ところで、苦労しても起業したきつかけは、横浜で税理士を営むご主人の田中潤さん(47歳)の一言だつた。「どうせやるのなら株式会社の方がいい」。ボランティア活動でないのなら信用第一を考えて持続的に活動できる方法を選択した方がいいというアドバイスだつた。そして、裕子さんの会社に、『鎌倉音楽絵巻』『横浜音楽絵巻』という音楽CD企画を提案した。地図草紙を読みながら聞くBGMというコンセプトだつた。夫婦協業をプレゼントしたのだ。

奥様に起業をアドバイスした背景にはそんな考え方があつた。奥様が色濃く反映していくに違いない。

ところで、奥様と一緒に共同ベンネームは、犬懸坂祇園。鎌倉のお住まいの近くにある吾妻鏡に記載された坂の名前によ来する。教養を示唆する名前だつた。こんなところにも、ご夫婦の息のあつた信頼関係が表されていた。

「なかじゅん」
1959年生まれ。神奈川県出身。立教大学経済学部卒業。横浜松坂屋勤務を経て、(株)日本経営研究所を設立。現在、同社代表取締役社長。(株)デパート新聞社主。
「なかゆうこ」
1963年生まれ。大学卒業後、銀行勤務を経て結婚。2001年2月、歴史探訪社代表取締役に就任。

原 良枝

ヒロインたちの女心を読み解く 律儀な読書家



想像力をかき立てる紀行エッセイ

何気なく歩いている街にはさまざまの人間ドラマがある。ことばの匠たちはそれを時代時代の風景とともに描いてきた元tvkアナウンサー原良枝さんの著書『彼女の場合』(かまくら春秋社刊)は、神奈川を舞台に匠たちの描いたヒロインに焦点を当てたエッセイ集だ。

女性の複雑な心理を紐解く入門ガイド本として読んでも面白いが、地元散策のネタ本として読むとさらに面白い。旅行情報と写真が満載されるガイド本とは違つて、街に暮らしたヒロインたちの心の動きと風景が活写されているからだ。通り一遍の情報本とは違つて、街への想像力をかき立ててくれる。

ベースになつたのは、かまくら春秋社が発行していた雑誌「かまくらからの手紙」の連載。原さんが大学を卒業してtvkのアナウンサーになつた翌年から始まつたものだ。タイトルは「小説の中の鎌倉・湘南」。20年くらい前の話である。単行本は、200回近く続いた連載の中から、小説に登場するヒロインに焦点を絞つてまとめられることとなつた。その数32編。

「建物は新しくなつても、店のたたずまいにはバタ臭さが残されているでしょ」。たとえば元町。

幅広いジャンルをこなす熱心な読書家の原さんが、普段の読書傾向は結構しかし、あらためて読み返してみると

どうも違う。「上滑りなものを見方をしていました」。当然だろう。「大学を卒業してまだ仕事を始めたばかりの小娘の延長線上での読み方と、結婚し、出産し、育てて独立してという状況での読み方はまるで違う。若い頃はヒロインに自分を重ね合わせることもあつたが、今は、距離を置くことができる。其感するものと、自分の生き方との違いをはつきりと区別できる」。だから、すべて読み直し、全面的に書き直した。故に、原形をほとんどとどめていない。

そればかりではない。作家がどういう視点で風景を見ていたのかを知ろうと思つて、すべて現地を踏破した。多くの小説家が描いた風景とは違つてきている。だが、原さんの眼には、「新しくはなつても、その土地の雰囲気、空気のようなものがどこかに残されていく」と写るそうだ。

偏つている。

カジュアルな読書ではサスペンス系好きな作家は、ジエームズ・パーションとか、レイモンド・チャンドラー。人間の心理の奥底を描くところが好きだ。恋愛ものはほとんど読まない。

「本棚を見ると日本文学よりも海外の方が多い」とする原さんだが、女性の立場での戦争責任にも興味があり、歴史ものもよく読む。

そんなこともあつて今年の夏は有隣堂ギャラリーで開催された「戦争を伝える会」で朗読もした。

朗読には力を入れている。施設、小学校、幼稚園など、お呼びがかかれれば準備も周到に積極的に出向く。

初見で朗読し録音する。それを聴いて、まずいと思うところをチェックする。これを何度も繰り返して録音する。これでもういいかなと思った最後の録音と、最初の録音を聞き比べる。また、そのプロセスの中で話す時間も調整する。朗読というパフォーマンスを仕上げる過程が好きといふこともあるが、決して手を抜かない。

「主人と娘からはうるさがられます、このプロセスが結構楽しい」と笑いながら語る姿に、プロの律儀さを感じた。▼

準備周到な朗読パフォーマンス

の原さんが、普段の読書傾向は結構

横浜捺染

地場で培われた 世界に誇る技術



エコロジカルな横浜捺染の技術

捺染とは、布に染料で図柄や模様を印刷すること。図柄を彫った版木に染料をのせ、布にバレンやはけで押し染めする染色技法を指す。日本では古くから更紗、友禅などに用いられてきた。木版、紙型を経て現在はスクリーン捺染になつてい

る。横浜の地場産業とされるスカーフはこの捺染技術によって支えられてきた。泉区で布の通販会社「㈱カレドニヤ」を

営む有賀茂さん（38歳、写真左）が、「㈱瀧澤捺染」と知り合ってコラボレーションをはじめたのは1年半前。きっかけは、横浜の捺染業界の組合の紹介だった。それまで、有賀さんは繊維業界に20年いた。そこは、流行を演出し、売る業界だった。しかし、年々その波は小さく、短くなり、在庫を抱えて苦しむようになつた。有賀さんは、そんな業界に疑問を感じて独立した。そして、自分が納得できる製品、生成り生地にシンプルな柄の商品を注文して作るうとした。

捺染は多品種小ロットで生産ができるのが利点だ。そこに目を付け、横浜の捺染業組合に相談し瀧澤捺染を紹介された。「小ロットで無駄のものを作らないことはエコロジーにつながる。また、横浜

の手捺染は世界に誇れる技術。魅力的な

ものを作りができると思いました」。

同じ頃、瀧澤捺染の三代目社長瀧澤靖さん（44歳、写真左から2人目）も、新しい時代の波の中で摸索していた。

最盛期、横浜の捺染業者は130社くらいあつたものが、現在では20社くらい。このまでは横浜捺染が消えると業界を上げてギルダ横濱という集団を2004年に立ち上げた。同集団は地場産業横浜スカーフの伝統を受け継ぐプリント（日本輸出スカーフ捺染工業組合）、製版（神奈川県捺染型協同組合）、縫製（神奈川県縫製工業組合）、染色（神奈川県染色協同組合）に所属する工場の集まり。

「横浜に来れば、あらゆる素材に対応し、少ロットや短納期についても十分ご相談に応じられる体制を整えて、手をわざらわせることなくモノがつくれることを訴えた」と瀧澤さん。お二人はそんな時代の流れの中で出会つた。

出会いが引き出す新しい価値

ている。

「手捺染だと、多品種少量生産が可能だが、コスト的には高くなる」からだ。1色ごとに版をつくるなければならないが、それに2万円以上かかる。だが、ダイレクトスクリーンなら6割ぐらいのコストでできる。

しかし、コンピュータで作る版と手で修正して作る版では線の味に違いが出る。また、同じ値段なら、アナログな手描きの線が持つ微妙な味の商品の方が売れるのだ。

横浜は付加価値の付くアナログ手法を守つて味を出すことにこだわる。だから瀧澤捺染では、「およそ7割の過程をコンピュータでつくり、残り3割に手作業を入れ、横浜の味と伝統を維持している」と瀧澤さん。お二人はそんな時代の流れの中で出会つた。

「地場で長く培われてきたものには、それがなりの価値が蓄積されている」と有賀さん。その話を受けて「伝統のモノ作りを大切にしながら、有賀さんのように消費者の嗜好や変化をつかんでいる人とトライしていくかなければいけないとと思う」と瀧澤さん。

新しい出会いは、新しい価値を生もうとしている。▼

【一口メモ】

『横浜捺染—120年の歩み』(ギルダ横濱スカーフ刊)によると、1875年(明治6)にはアメリカ商店の注文で絹の手巾(ハンカチ)をはじめて輸出したとある。当時は、まだ、白地か無地の染物だったらしい。

今日につながる柄物のハンカチは、1890年(明治23)にフランス人のメニールによって作られた。これがヒットし、ハンカチは盛んに欧米に輸出されるようになった。横浜開港当初から生糸は主要輸出品目であったが、明治も半ばをすぎると付加価値を付けた加工品として輸出するようになっていたわけだ。つまり、製織されたものを製品に加工する付加価値産業として育っていた。

How To Taste Musics In Yokohama.

横浜の聴き方

第1回

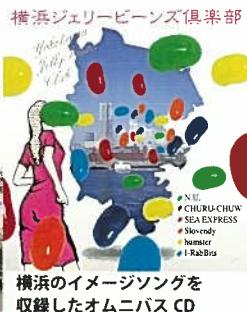
「よこはま・たそがれ」「海を見ていた午後」



木ひろしの「よこはま・たそがれ」(1971年)は大ヒット曲だが、ご当地ソングとしての完成度はそれほど高くないと思う。「よこはま」でなければならない必然性が歌詞に稀薄だからである。ブルースやかもめなどの定番を歌詞に採用しているが、別に横浜ではなくて神戸でもかまわないという感じがする。

そもそも、そんな必然性を備えたご当地ソングがあるのかという疑問もあるが、荒井由美的「海を見ていた午後」(1974年)はかなり高い「必然性」を持った曲である。私小説的な歌詞で、歌謡曲的な「通俗」を一切排している(だからニユーミュージックなのだが)。それでいて歌の世界を追体験したくなるほど、聴き手が感情移入してしまいう力を持っている曲である。

千葉県民たつ麻生圭子も曲の舞台となつている「山手の静かなレストラン・ドルフィン」を経済新聞2003年2月15日。そのためには、根岸駅台のドルフィンは「山手のドルフィン」でなければならなかつたし、本当は見えなくても「晴れた午後には遠く三浦岬が」見えなくてはならなかつた。八王子出身の荒井由美(ユーミン)がここまで「横濱をつかんだのは偉だ」と思う(高尾山ではニユーミュージックになりにくくしね)。ユーミンは聴き手に「ありもしない思い出を後から作らせてしまう」名人である。そんなことができるからこそ天才なのだろう。(中島久)



横浜信用金庫では、2009年を記念して、横浜開港150周年を記念して、

横浜イメージソングCD 発売記念コンサート

横浜のイメージソングを収録したオムニバスのCD「横浜ジェリービーンズ倶楽部」を制作し、その発売記念コンサートを2006年6月3日、横浜市開港記念会館で開催しました。

「N・U・」「SEA EXPRESS」「SLOVENDY」「I-Rabbits」「humstar」「CHURU・CHUW」がCDに収録したイメージソングをそれぞれ発表しました。



商店街ジェリービーンズ・コンサート

横浜信用金庫では、地元商店街のお祭りやイベントを盛り上げるために、営業店が中心となり地域貢献活動の一環としてコンサートを開催しています。最近では、2006年8月26日大口通商店街、9月30日菊名西口商店街で開催し、横浜で活躍するインディーズ・バンドの「SEA EXPRESS」「マイクロニクル」「CHURU・CHUW」「I・Rabbits」などが出演してくださいました。

Information

横浜を拠点に活動する4人組男性コーラスグループのhumstarがワンマンライブを行います。

humstarワンマンコンサート「ラブレター from 横濱DX」

日時：2007年1月28日(日)開場16:00開演17:00
会場：横浜市開港記念会館(みなとみらい線日本大通り駅下車)

料金：前売2,500円 当日3,000円(税込・全席自由)

チケット：ローソンチケット発売中

問合せ：ダブルフューチャー(TEL045-439-7337)

横浜ルネサンス No.8

2006年11月30日発行

発行 横浜信用金庫

〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel:045-651-1451(代) Fax:045-651-2303
<http://www.yokoshin.co.jp>

編集 横浜信用金庫総合企画部

(横浜ジェリービーンズ倶楽部)
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd.

*横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます
本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで



横浜観光プロモーションフォーラム

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

地域の皆様の『よこしん』

since 1923

横浜観光プロモーションフォーラム

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する横浜信用金庫の「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

◎ 横浜信用金庫

<http://www.yokoshin.co.jp>

